

地研ニューズレター

—地域連携センターニューズ—

ISSN 1882-4218

目次

- ◆地域連携センター長あいさつ..... 1
- ◆青森まるっとよいどころ祭り..... 2
- ◆創業・起業セミナー..... 4
- ◆青森市学生ビジネスアイデアコンテスト..... 4
- ◆地域連携センタープロジェクト事業..... 5
- ◆地域連携センター研究員研究報告..... 9
- ◆受託研究・受託事業..... 10
- ◆公立はこだて未来大学交流事業..... 11
- ◆公開講座..... 12

地域連携センター長あいさつ

この地の知を学ぶ機会と時間を



写真① 西目屋村 プナコ西目屋工場で見学



写真② 風間浦村 畠山商店 魚箱製作の見学



写真③ 風間浦村 青森ヒバ専門店わいどの木 聞き取り調査

2024年は、人口減少・少子高齢化の流れを強く感じる年であった。総務省統計によると、青森県の総人口が120万余となり、前年より2万人近く減り、人口の減少率は1.63%と全国で2番目に、また、転出者の数は、転入者の数を5,285人上回り、統計開始以降70年以上連続で「転出超過」となった。また、帝国データバンク青森支店の調査によると2024年の企業の休廃業・解散件数は564件（前年比7.6%の増）、法的整理による倒産件数は77件（前年比35%増）と働く場も減少傾向にある。こうした中、若者の定着や還流といったことがより重要視され、具体的な政策が青森県を筆頭に関係各所で打ち出された年でもあった。

地元離れの原因は様々あるかとは思いますが、若者が都会志向になるのも無理もない。その一つに「地の知のズレ」を指摘しておきたい。「地の知のズレ」とは（私の勝手な造語であるが）、この地（場所）に生きていながらも、頭の中（知識や情報、生活の知恵など）は、この地に関するものが少なく、この地で生きていく知恵や楽しみ方をよく知らない状態ということである。仮に朝から深夜までテレビ見ていたとしても、地元ローカル局の番組放送時間は平日1社あたり合計約1時間40分から2時間ほどで、他は都会のキー局からの情報である。また、テレビ離れが進み、若者は各種のSNS等から情報を得ている。消費者庁のSNSの利用状況についての調査によれば、10歳代後半で「1日3時間以上の利用」が44.6%、「1～3時間時間未満」が35.8%である。極端に言えば「体は田舎、頭の中は都会」という状況は、情報化社会の趨勢、情報量の観点からすれば、致し方ないとはいえ、質的観点では「地の知のズレ」を挽回しなければならない。

10月12日（土）、13日（日）開催の「まるっとよいどころ祭り」に際し、今年度は「地域の魅力レポート」と称して、「若者の視点から地域の魅力を発掘、発信する」という試みを行った。地域連携センターの研究員とゼミ学生が県内12自治体を夏季休業期間に訪問し、関係者の方々に取材や調査活動を行った。訪問先で学生達は、

多くの方々から貴重なお時間をいただき、各地の歴史や文化、産業、経済、ビジネス、生活の工夫など、多面的に学ぶことができたかと考える。本来は、本学の地域貢献を目的とした物産展ではあるが、若者が「この地で生きる知を学ぶ機会」「地の知を還流する機会」として、重要な事業であると認識している。地域の方々のご協力に感謝しつつ、大事に継続していくことを願ってやまない。

地域連携センター長 准教授 生田 泰亮

青森まるっとよいどころ祭り

本事業は、青森公立大学が主催する地域PRイベントである。地域連携協定を締結する自治体をはじめ、その他の県内団体様から出展協力を得て開催し、地域製品のPRなど地域活性化へ向けた貢献を大学が主体的に果たすとともに、学生が地域経済の現場で実践的に学び、青森地域への関心を高め、将来の青森地域を担うことができるよう人材の育成を目指す。

今年度は学生が事前に各参加自治体を訪れ、学生目線で地域の魅力を伝える「地域の魅力レポート」を作成し、イベント会場で展示した。



取材：地域みらい学科 生田ゼミ 2年生

観光地・名所・イベント
白神山トレッキング・ビジターセンター
世界自然遺産である白神山のブナ森林を涼やかな心地の良い空気の中散策できます。散策道の入り口には水飲み場があり、ブナ森林ならではの湧き水でフレッシュできます。
また、そばには湯入の滝門が流れており、普段体験できない大自然を味わうことができます。
ビジターセンターでは白神山の歴史、生態系を学ぶことができ、知識を深められ、よりブナ森林を楽しめます。

グリーンパークもりのいずみ
グリーンパークもりのいずみはキッチンや調理器具を完備し、長期滞在も可能な滞在型温泉施設です。
特徴的なのは、西目屋村発祥のごまごんが内装に施されていることです。照明の紐やスイッチなど、所々にごまごんを見つけて楽しんでみてください。
夕食は各部屋のキッチンを使用し、白神産の食材でカレーを作りました。好きなものを思うままに食べることができ、大満足です！！

BUNACO製作
BUNACO (ブナコ) 西目屋工場では、製作工程の長さと製作体験を行うことができます。薄いテープ状に加工したブナをコイルのように巻き重ね、湯飲み茶わんを使って押し出し、ずらりと連続したひとひとつ手作りで行われています。
製作体験では、ブナの木の繊維が露かされながらも自由自在に木材を捲ることができ、面白い作業の楽しさを体験することができます。
他にも、BUNACOの木製工芸品が購入できるミニショップや、BUNACO製品に贈られた「BUNACOGOGGI」も頒布されており、カラフルなインテリアやブナの木の温かさが感じられる店内は可愛らしく、癒される空間でした。

写真① 地域の魅力レポート (西目屋村①)



ニシメヤ・ダムレイクツアー
ニシメヤ・ダムレイクツアーは、水陸両用バスに乗り、陸上約40分、水上約20分の約1時間で西目屋村の自然や街並みを堪能するツアーです。
運行中は、地元ガイドについて詳しく解説していただきます。
また水陸両用バスは景観が高く、窓がないので、船を走らせているのがアトラクションのように楽しむことができます。
普段あまり見ることのできない湖沼白神湖の内湖や自然を身近で感じることができるため、子供から大人まで楽しめる内容です。

特産品
BUNACO製作
BUNACO (ブナコ) 西目屋工場では、製作工程の長さと製作体験を行うことができます。薄いテープ状に加工したブナをコイルのように巻き重ね、湯飲み茶わんを使って押し出し、ずらりと連続したひとひとつ手作りで行われています。
製作体験では、ブナの木の繊維が露かされながらも自由自在に木材を捲ることができ、面白い作業の楽しさを体験することができます。
他にも、BUNACOの木製工芸品が購入できるミニショップや、BUNACO製品に贈られた「BUNACOGOGGI」も頒布されており、カラフルなインテリアやブナの木の温かさが感じられる店内は可愛らしく、癒される空間でした。

写真② 地域の魅力レポート (西目屋村②)



「まるっとよいどころ祭り」出展品紹介
熊の工房
西目屋村特産品の「白神そば」と「熊ソーセージ」を紹介します！
「白神そば」のバックグラウンドには、豊かな湧水、壮大なブナ林など、白神山の大自然が作り出す様々な要素があり、その魅力が伝わる。物・事・人によって大きく引き出されています。村内で生産された良質な小麦粉を使用し、つるつるとした弾力と爽やかな風味が特徴です！天ぷらや山菜などと一緒に楽しむことができます！
道の駅遊楽白神ビーチに併設する食品加工センター「熊の工房」では、「白神そば」打ち体験をすることができます。
初めてのそば打ちも、気軽に楽しむことができます。
「熊ソーセージ」は7月に発売された新商品です！県内特有の独特な臭みはなく、ジュシーで肉々しき美味のソーセージで、お肉との相性は最高です！西目屋村の特産品をぜひご賞味ください！！
協力：西目屋村役場 (一財) ブナの里白神公社

写真③ 地域の魅力レポート (西目屋村③)



イベントは、本学キャンパスにおいて大学祭と同時開催され、青森まるっとよいどころ祭りを見たことのない学生などの若年層、大学祭に来ることのない一般市民がお互いのイベントを知る良い機会となり、大学祭と合わせ約 1,600 人の方にご来場いただいた。

各自治体の出展のほか、本学学生によるゼミ等 5 団体が出展し、活気のあるイベントとなった。





写真⑨ 田子牛ハンバーガーほか（田子町）



写真⑩ シフォンケーキ（外ヶ浜町）



写真⑪ 手作りの店頭 POP（渡部ゼミ）



写真⑫ ほたてフライ（生田ゼミ）

< 2024 年度開催状況 >

開催 日：2024年10月12日（土）、13日（日）

参加 団体：鯨ヶ沢町、今別町、おいらせ町、大間町、佐井村、七戸町、外ヶ浜町、田子町、中泊町、西目屋村、東通村、蓬田村（12 町村）

出展ブース参加：青の煌めきあおもり国スポ・障スポ PR キャラバン、青森市立浪岡病院



写真⑬ イベントに参加した学生たち

イベント会場において能登半島地震及び能登豪雨の被災地支援のための募金活動を行い、2 日間で合計 45,361 円が集まりました。たくさんの方々にご協力いただき、誠にありがとうございました。いただきました募金は、石川県の災害義援金受付窓口へ送金しました。皆様のお気持ちが被災した方々の支えになることを願っています。

創業・起業セミナー

2024年6～7月、創業・起業に関心のある学生を対象として、連携協力協定を締結する公益財団法人21あおり産業総合支援センターから講師を招いて創業・起業セミナーを行った（全3回）。

- ・第1回「「ブランディング戦略」から考える創業・起業」（チーフプロジェクトマネージャー 加藤哲也氏）
- ・第2回「創業・起業に「IT活用」を考える」（コーディネーター 小野康一郎氏）
- ・第3回「創業・起業の「ビジネスモデル」を考えてみよう」（インキュベーションマネージャー 奥崎千詠子氏、チーフプロジェクトマネージャー 加藤哲也氏）

全3回で延べ22名の学生が参加し、参加者の中には起業に興味のある学生が多く、同じ志を抱いた仲間と意見を交わす姿が印象的であった。



写真① 第2回の様子



写真② 第3回の様子

青森市学生ビジネスアイデアコンテスト

2024年12月1日（日）、ねぶたの家ワ・ラッセイベントホールにて「令和6年度青森市学生ビジネスアイデアコンテスト」が開催された。

青森市から8団体、函館市から4団体の計12団体が参加した。

今年度の本学代表は、佐藤木乃香さん（地域みらい学科4年）、川田青空さん（同左）の2名で構成された「Blue Tree」であった。

青森ヒバをふんだんに使用した室内型足湯アクティビティとお土産を自ら食べて納得し持ち帰る、という体験を通じて思い出作りができるサービスを提供するビジネスプランを発表した。

残念ながら上位入賞は果たせなかったものの、プレゼン時のスライドの完成度の高さや明るく元気に発表する姿が印象に残った。この経験を基に、実社会で活躍してくれることを期待している。



写真① プレゼンの様子



写真② プレゼン、お疲れ様でした！

地域連携センタープロジェクト事業

伝統文化のアーカイブ化 ～青森ねぶた祭を中心に～



写真① 仙北小鷹さんさ踊り保存会（岩手県）

本事業の主旨は前年に引き続き、伝統文化の継承のために体系的、集約的なデータのアーカイブ化を行うことにある。なお本事業は特に青森ねぶた祭の伝統を継承し後世に伝えるため、他の地域の芸術、アート作品の収集・保存・展示方法を学び、それを青森に活かすことである。

この目的を達成するため、①祭礼のアーカイブ化の先進事例、②芸術作品の継承と保存方法、およびねぶたとの関連の調査、③「青森ねぶた祭」のアーカイブ

化に関する研究会を行った。①に関しては、本年度は東北の祭礼の収集・保存・展示方法、「地域×アート」の先進事例に関して調査を行った。9月に集中的に調査を行い、岩手県の祭礼（さんさ踊り、盛岡八幡宮の例大祭）、宮城県仙台市の七夕祭、山形県の花笠、秋田県の竿灯などの伝承方法について学んだ。特に岩手、山形では伝承を実践している現場に足を運んだ。調査全体を通じてわかったことは、外部からの来訪があった際に、地元文化を象徴するような展示施設があることが重要だという点、また伝承のために小学生、中学生から積極的に伝統文化教育を行うことの重要性であった。この内容に関しては2024年11月にねぶたの家ワ・ラッセにて報告を行った。

②に関しては昨年同様に美術館、博物館の調査を行った。東北調査では本間美術館、天童市広重美術館、京都では京セラ美術館、京都文化博物館、嵐山の福田美術館、福井県では福井県立美術館、和歌山では無量寺申本応挙芦雪館、東京では東京都美術館、泉屋博古館東京などを訪問した。そこでは収集・保存・展示の工夫がなされていることがわかった。特に解説などは音声ガイドを含め、専門家の役割が際立っていた。また日本画の技法、題材などがねぶた制作に強い影響を与えていることがわかった。「ねぶた」のアート性を説明する要素が増したといえる。また「ねぶた×アート×地域」という枠組みで、青森市自体、特徴のある街づくりが可能であることが確信された。

③については、研究会を定期的に行い、「何を、どのように保存するか」に関して意見を出し合った。本年度は写真に注目し、故サトウユウジ氏の写真を研究会として扱っていくことが確認された。また、研究会での成果を日本オーラル・ヒストリー学会の大会校企画ワークショップ「伝統文化をアーカイブする」にて、本研究会メンバーの3名が報告することができた。全国の研究者に向けた青森ねぶた祭、「ねぶた」そのものの価値についての報告を通じて、本研究会が学術的にも重要な取り組みを行っていることが認識された。

以上本年度も主に調査研究が中心であったが、学会など外部への発信ができたことは大きな成果であった。また、故写真家のサトウユウジ氏のねぶた写真を利用することができるようになった。このため、今後は写真の分類、一般展示などを行っていくことが目標となった。



写真② 伊藤若冲 「軍鶏図」

少子高齢社会における育児政策及び地域振興政策に関する研究

本研究事業は、少子高齢社会における育児政策及び地域振興政策の人口動態に対する効果を明らかにするために行われた。青森県では、人口減少の克服を県政の最重要課題として位置付けている。その課題解決に向け、「出産・子育て支援と健康づくり」を掲げており、人口減少のスピードを緩和するための取り組みが行われている。また、同様の人口問題は日本全国の多くの市町村で抱えている課題であり、各地域では様々な人口政策が行われている。これらは各地域において固有の効果しか発揮できないものではなく、多くの地域で互いに適用が可能である。しかし、本県は地理的な特徴から、他地域の政策の内容やその効果について県民が触れられる機会が少ない。そこで、本事業では、育児支援政策をはじめとした人口政策の効果に関する研究成果や現場の事例について市民の認知を高め、ポストコロナの地方創生を市民の間で議論する機会を設けた。

上記の問題意識のもと、先駆的な育児政策を行っている兵庫県神戸市へ人口政策に関する聞き取り調査を行った。同市は、消滅可能性自治体に指摘されているものの、高校生以下の医療費の無償化や若者世帯向けの住宅取得に関する補助が盛んに行われており、近年は人口減少が緩和されている。

上記の聞き取り調査を行った後、総務省地域力創造アドバイザー・萩原幸亮氏（兵庫県立大学非常勤講師）に招待講演をいただいた上で、市民向けのワークショップを行った。本学にて行った萩原氏の招待講演では、インフラの整備や関係人口（「移住」「観光」以外で地域に関わる人口）を手掛かりに兵庫県神戸市を含む自治体における事例を取り上げ、移住促進のための政策について紹介をいただいた。また、東京在住者の多くが出身地域へ戻りたいと考えているというデータも示された。

また、萩原氏と共同で市民参加型のワークショップをリンクステーションホール青森にて行った。本ワークショップでは、出生及び人口移動に関する経済学的な考え方について理論的・実践的な観点から講義を行った上で、本県における出生率改善及び人口定着を達成するための育児政策や地域振興政策について参加者同士で立案・議論を行った。ワークショップへは本学学生も参加し、本県や他の自治体のデータや事例、経済学の理論的枠組みを参考にしながら、グループに分かれて議論・発表を行った。

上記の招待講演へ参加した方の中には移住について新しい考え方を得ることができたという声があった。他、本県のインフラ整備について問題意識を持っている方が多いということもわかった。また、ワークショップでは、移住促進を目的とした企業と新卒者の雇用におけるマッチングイベント、移住支援金制度、家賃補助制度の他に健康寿命の延伸を目的とした健康診断の受診促進、銭湯とジムの連携などについて参加者から提案があった。

本事業を通じて、公立大学生や地域住民の人口減少克服に対する理解が深まったのであれば幸いである。今後は、未来を担う高校生等の若い世代が将来育児に励みやすい社会の実現に向けて政策を提言できる社会を期待している。

講師 異 一樹



写真① 萩原氏の招待講演



写真② ワークショップにて議論・発表を行う本学学生

青森県の外国人労働力 ～第一次産業を中心に～

青森県内の外国人労働者は2023年10月で5,584人であり、コロナ後東北一の増加率である。しかし、多くの受け入れ機関では、ベトナム本国の状況、送り出し機関の方針、そして派遣される人々のライフステージやキャリアについてあまり関心を持っていない。そこで本事業では、送り出し機関の調査を行った。

送り出し機関に関する調査は2024年12月23、24日に、ベトナムのホーチミンシティにおいて行われた。訪問先は送り出し機関（COCORO国際株式会社、ESUHAI）2か所、日本語学校（さくら日本語学校、ドンズー日本語学校）2か所であった。COCORO国際株式会社（写真1）の特徴は、技能実習生はもちろん、特定技能さらに「技術人材」の育成に力を入れていることである。「技術人材」はベトナムの大学、短大卒の学生を中心にN2、N1の日本語力を求め、IT関連の職種で働いてもらう人材である。ESUHAIの特徴は、送り出し機関と日本語学校を別組織として設立している点、そして帰国した人々へのフォローも行っている点であった。COCORO国際株式会社同様、専門管理人材＝高度人材の育成にも力を入れている。どちらの組織においても日本語教育を徹底しており、それが日本での就労機会の向上につながるという意識を持っていた。これは訪問した日本語学校と同じ意識といえる。

調査において指摘されたことは、日本は「中国、英語圏より労働市場の競争率は低く、しっかりとした人材育成がなされるため、将来のキャリアアップにつながることが多い」という評価である。この期待に応えられるように日本社会も対応していくべきであろう。

地域連携センター 兼任研究員 教授 佐々木 てる



写真① COCORO 国際株式会社



写真② ESUHAIの日本語学校で学ぶ学生

青森県内の小中高等学校英語科における個別最適な学びに関する研究事業

本研究事業の目的は、青森県内の小中高等学校英語科教員を対象に、個別最適な学びに関するアンケート調査を行い、その現状と課題を明らかにすることである。回答した教員数は小学校125人（学級担任：90人（72%）、専科教員：26人（20.8%）、ALT・支援員：1人（0.8%）、その他：8人（6.4%）、中学校76人、高等学校72人であった。調査の結果、個別最適な学びの取組状況や課題において3校種間で大きな差はなかった。具体的な現状としては、教員の個別最適な学びについての趣旨理解が不十分であること、指導の個別化や学習の個性化の取組は全体的に十分ではないこと、ICTの活用は高いが学習環境は十分整っていないこと、現在でも学習規律が重んじられ、一斉指導に頼る指導法が取られていること等が明らかになった。しかし、個別最適な学びの必要性、重要性は強く認識されており、教員が自身の考え方を変えなければならないという意識を持っていることも示された。課題としては、教員不足、多忙感、教材の準備や個別に指導する時間の不足、学力や意欲の大きな個人差、個別最適な学びの具体的な指導法の理解や知識の不足、多様な指導の必要性がある児童生徒の多さ、研修機会や実践例の不足、教員の力不足、指導の限界を感じている教員の多さ等が挙げられた。そして、これらの課題は個別ではなく互いに関連して生じていることが問題をさらに複雑化・深刻化させていることが示唆された。解決策としては、3校種の現状や課題が同じであったことから、縦軸となる英語科における校種間連携や横軸となる校内での教科間連携が有効であること、行政が研修機会を設定して啓発を図り、学校現場での実践を手厚くサポートすることが提案された。

地域連携センター 兼任研究員 教授 丹藤 永也

青森県における文化遺産の保全と活用 — 人類学・考古学の先進的研究の理解増進 —

2021年に北海道・北東北の縄文遺跡群は世界遺産に登録された。2024年には青森市に縄文遺跡群情報発信拠点施設「じよもじよも」が設立され、縄文遺跡の魅力伝える出土品や映像を通して観光客に情報を提供する場が整備された。青森県は縄文遺跡を代表として世界に誇る文化遺産を有しており、近年では縄文遺跡の価値を高めようという動きは顕著であるが、現在の教育・研究・普及は十分のものであろうか。

青森県では縄文遺跡は情報発信や一般への啓蒙活動に注力している点は注目されるが、下記の理由から縄文遺跡の価値を十分に引き出すには至らない。

第一に、縄文の研究は近年大きく進展しており、縄文の魅力発信は日々更新される研究を踏まえた活動であるべきである。第二に、縄文遺跡の魅力発信の手法は適切かという点である。発信のほうに主眼が置かれて、メッセージ性が乏しい現状を危惧する。第三に、海外の訪問者や専門家を含めて、青森県に訪問する多様な人々に向けた魅力発信であるかという課題である。文化遺産に関する先進的研究の推進と地域への還元は急務である。

本研究では、東京大学・国立科学博物館等を見学し、青森の文化遺産や伝承の保全・研究に関する問題点の調査を行った。結果、青森県の文化遺産の多くは東京等の県外に移動し、地域の人々が地元でその価値を理解する機会が失われているという問題点、博物館が極めて少ないため文化遺産や伝承の保全の機運に恵まれていないという問題点が浮き彫りになった。これは文化遺産だけではなく、過去の災害の記憶が失われていく課題も伴っており、防災という現実的課題にも直結する重要な課題である。

地域連携センター 兼任研究員 教授 長岡 朋人



写真 東京大学総合研究博物館への訪問

「テロワール」として捉える青森の土地空間・文化・農林水産物と そのブランディング化への試み：地形地質学と第四紀土壌学を活用して

かつてヨーロッパで開催された地質学関連の国際会議に参加したとき、「ワインと地質学」と称する、少し場違いに感じるセッションが設けられ、不思議に思ったことがあった。その時、出会った言葉が、フランス語で土地や地球を意味する「terre」に由来する「テロワール」である。これは、もともと、フランスワインの特性を形作る、土地（畑）の地形、地質、土壌、気候といったブドウ畑を取り巻く全ての自然環境、時代を超えて引き継がれてきた人々の技術等を含む概念である。「テロワール」は、フランスのワイン法（原産地統制名称法）のベースとなって、フランスワインの格付けを行う際の重要な要素になっている。

ジェームスE. ウイルソンの著書『テロワール—大地の歴史に刻まれたフランスワイン—』は、その概念の面白さを次のように語っている。「グラス一杯の素晴らしいフランスワインに出会うとき、それがどこでどのように造られたのか知りたいという思いにかられる。ワイン愛好家であれば味や香りを堪能すればすむかもしれないが、地質学者という職業柄、興味はそのワインの故郷である地質へと向かうのだ。結局、葡萄の良しあしは、その樹の根をはぐくむ岩石と土壌によって決まるのではないだろうか。もちろん気候という要素は大きいにしても、さまざまな地質が、素晴らしいワインとそうでないものとの差を生むような気がする。」

いまでは、「テロワール」は、定義の曖昧さを残しつつも、ワインに限らず、世界各地のチーズ、ウイスキー、日本酒といった農産加工品、その原料となるさまざまな農林水産物にまで拡大し、その地域固有の「自然と人の物語」にもとづいて食の魅力語る際の言葉として用いられるようになってきた。

青森は、グローバルな気候変動（氷期—間氷期サイクル）とプレート活動による地殻変動が組み合わさって、特徴的な陸上と海底の地形地質が配置されている。そして、それに伴う多彩な土壌の分布、脊梁山脈を隔てた東西の冬季の降雪環境の違い、森と河川を通じた陸と海との繋がり、縄文時代以降の人々の暮らし等、多彩な自然と人の物語が存在する場所である。これらの財産を、包括的に「テロワール」として新たに知的に捉えなおすことで、地域の魅力を独特な形でブランディング化することに繋げられるのではないかと考えている。

地域連携センター 兼任研究員 教授 三浦 英樹

地域連携センター研究員研究報告

「青森まるっとよいどころ祭り」開催に向け、地域貢献研究活動等推進費による調査研究業務では6月初旬から地域巡回活動として自治体（七戸町・田子町・おいらせ町）を訪問し、担当教員である野坂真准教授とともに移動ルート確認・スケジュール調整に努め、円滑な現地調査を実施した。訪問先でのインタビュー調査等に基づいた地域の魅力レポート作成を通じ、参加学生達は当該地域の魅力や課題を見出すとともに、よいどころ祭り当日は積極的なPR活動に取り組んでいた。イベント開催後の振り返りと関係者間での情報共有によって、次年度以降の実施方法の改善を進めていきたい。

また弘前大学での日本農業市場学会、農業農協問題研究所研究例会などに参加し、食料・農業・農村に関わる国内外の諸問題に関する研究動向についての情報収集を行った。加えて、外部資金（田子町農業振興計画推進に係る調査・支援業務）の一環として、東北農業経済学会山形大会における大会シンポジウム報告（第2報告：複合農業経営と女性農業者－青森県田子町を事例として－）を行った。今年度の研究成果をもとに、地域に根差した研究・教育活動のさらなる展開につなげたい。

地域連携センター 専任研究員 後藤 厚子



写真① 田子町 かぎかけの木

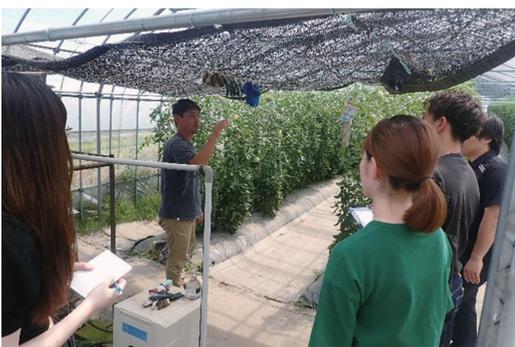


写真② 観光農園「アグリのリおいらせ」調査

「青森まるっとよいどころ祭り」では本学学生による地域の魅力レポートを作成するため、担当教員である安田公治講師と学生らとともに青森県蓬田村、外ヶ浜町、今別町を訪問し、現地調査を行った。蓬田村ではトマト農家や物産館、外ヶ浜町では漁業協同組合や町役場産業観光課、今別町では地域の祭りである荒馬保存会や畜産農家を対象にインタビュー調査を行い、特産品や伝統行事の継承方法、隠れた観光名所などの地域の魅力発掘と課題の抽出やその背景などに関して、学生が円滑に調査できるようサポートした。

また学内における地域貢献研究活動等推進費ではむつ市で開催された日本ジオパーク全国下北大会や弘前大学での農業農村工学会大会講演会などに参加し、青森県における防災や気候変動をはじめとする農業農村の地域課題に関する最新の研究や事例について情報を収集した。外部資金（科学研究費助成事業、日本沿岸域学会研究グループ助成）では農山漁村地域の気候変動対策や市民科学による地域の海岸保全、環境教育に関する国内外の調査研究を進め、学会などで口頭発表およびポスター発表を行い、研究成果を公表した。

地域連携センター 専任研究員 松本 京子



写真① 蓬田村での調査



写真② 今別町の荒馬まつり

受託研究・受託事業

情報リテラシー教育におけるナレローの効果測定およびレビュー

本学で開講している「情報リテラシー I」では、MS-Office 実習・成績管理システムである「ナレロープレミアムシステム」を用いて授業時間外の学習を課し、オフィスツールの活用スキル向上に成功してきている。

MS-Office ツールはメニューが階層構造になっており、操作方法を知らなくても、メニュー階層を辿っていくことで、ある程度は直感で目的の機能にたどり着くことができるという特徴があることから、「試行錯誤」を繰り返して正解操作を探し出そうとする初学者の割合が多い。

昨年度の研究では、学生の学習行動の特徴である「試行錯誤」に注目して分析した結果、スキルが向上するにつれて試行錯誤が減り、IRTの収束時間が短縮されるという、「習得段階仮説」を提示した。今年度はこの仮説に基づき、従来判別できなかった試行錯誤型の正解者と即答型の正解者の習熟度を判別することを試み、個々の試験で能力値が収束するのに要する時間や問題数、及び収束後の能力値を測定し、それらの相関を検討した。

その結果、学期当初の能力値分布は試験時間に対して正の相関を示すものの、学期末になって操作スキルが身につく時期になると、能力値分布が試験時間に対して負の相関を示すようになるという結果が得られた。すなわちナレロー学習前の入学時点では、時間をかけてでも試行錯誤する学生の得点が高く、他方ナレローで学習し操作スキルが身についた学期末になると試行錯誤する学生の割合が減り、試験解答時間も短縮する傾向が強まる結果となった。また学期末では学期当初と比して20～25点程度の能力値分布の向上が見られるが、時間をかけて試行錯誤する学生よりも、操作方法を覚えて即答する学生の方が能力値の向上幅は大きく、得点の高い学生ほど短時間で試験を終えられることが示された。

学長 教授 神山 博

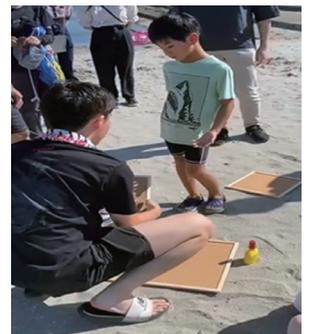
大学生による移住促進に向けた体験プログラム企画開発業務

当移住体験プログラム企画では、青森県蓬田村において青森公立大学安田ゼミの2年生及び3年生の企画立案で蓬田村の農業と自然を活用した1泊2日の体験プログラムを実施した。宿泊場所については蓬田村に現地での宿泊を企画できないか打診したところ、ふるさと総合センター内でテント泊を行う事が可能となった。

移住体験プログラムは8月24日に蓬田村ふるさと総合センターを会場に移住モニターに集合していただき、青森県外から1名、青森県内から3名（小学生の子ども1名を含む）計4名が参加した。移住体験プログラムでは大人と子ども両方が参加できる企画を考案した。8月24日初日は蓬田村の玉松和太鼓の演奏を聞き、移住モニターも和太鼓を叩くなどの体験を行った。その後、玉松海水浴場へ移動し、海水浴と学生が企画したサンドアート体験を行った。8月24日の夕食には蓬田村のホタテも使用したバーベキューを行い、翌日8月25日のトマト収穫体験では受け入れ農家の増尾氏も参加し、移住モニターと蓬田村民間での交流を行う事ができた。

8月25日は蓬田村のトマト生産農家の増尾氏のハウスにおいて、トマトの収穫体験を行い、昼食には蓬田村産のトマトとホタテを使用した調理体験を行った。当移住体験プログラムの参加者1名から蓬田村への移住体験プログラムのインタビューも行ったが、回答として蓬田村への移住を考えるとという事までは至らなかったが、蓬田村の海や食べ物などの雰囲気や人間性を知る事ができたという回答を得た。当体験プログラムで分かったこととして移住体験プログラム参加によって蓬田村の雰囲気を知ってもらう事につながり、蓬田村に対する印象を向上させることは可能であるものの、移住の促進に対してはまだ十分とはいえない可能性があるということである。今後、移住促進をより進めていくためには蓬田村へのイメージを掴んでもらう事に加えて、さらに移住を希望する人に限定した就業体験プログラムの実施なども必要ではないかと思われる。

地域連携センター 兼任研究員 講師 安田 公治



写真① 玉松海水浴場でのサンドアート体験



写真② 玉松和太鼓演奏体験

田子町農業振興計画推進に係る調査・支援業務

本事業は、2024年度「田子町農業振興計画推進に係る調査・支援業務」として、田子町からの委託を受け、2022年度・2023年度同町が実施した基礎調査・詳細調査の結果を踏まえた調査・分析を行ったものである。地域資源活用による活性化にかかる先進事例調査からは、各地域における住民間での情報共有と地域間での交流を含む活動の継続が、新たな取組の展開につながる可能性が見出された。京都府南丹市美山町の「日本茜伝承プロジェクト」では、女性農業者を中心とした生活改善グループの活動を端緒として、農産物加工から工芸作物生産・加工へと多様な活動が拡がり、関係人口の増大へと展開してきた経緯が明らかになった。

また、同町の女性農業者を対象に、今後の持続可能な同町の農業・農村振興に係る具体的な関連施策の検討に向けて、現在の営農状況や「土づくり」等に関する意向調査を実施したほか、2023年度に引き続き、町内で生産した蓼藍を使った藍染め実習（2024年11月10日開催）、女性農業者研修（2024年12月11日開催：研修先（八戸市・階上町・岩手県洋野町））とその振り返りワークショップ（2025年2月10日開催：女性農業者・同町職員・地域みらい学科2年生、計10名参加）を実施した。参加者からは、地域活動における関係者間の情報共有と対話の重要性を再認識したとの声が寄せられた。今年度の研究成果をもとに、同町の地域振興に資する調査研究活動を継続していきたい。

地域連携センター 専任研究員 後藤 厚子



写真① 女性農業者研修（階上町漁協女性部との交流）



写真② 田子町ひとくるめ文化祭での藍染め実習



写真③ 「田子の暮らしを考える」ワークショップ

公立はこだて未来大学交流事業

2024年度の本学と公立はこだて未来大学との交流事業として、双方の大学で公開授業をおこなった。

・第1回 11月7日（木）会場：公立はこだて未来大学講堂

第1部：「ICTによる地域経済活性化」

公立はこだて未来大学 富永敦子教授

第2部：「プラットフォーム・ビジネス そのルーツと現状」

青森公立大学 生田泰亮准教授

公立はこだて未来大学を会場とし、サテライト会場である青森公立大学大学院棟1212教室へオンライン配信をおこない、両大学の学生が受講した。

・第1回 12月7日（土）会場：青森公立大学544教室

第1部：「プラットフォーム・ビジネスとデータポータビリティ」

青森公立大学 行本雅准教授

第2部：「医療・健康分野の社会課題解決に期待されるデジタルヘルス」

公立はこだて未来大学 石榑康雄教授

青森公立大学を会場とし、一般市民も受講可能としたほか、オンライン配信もおこなった。



青森公立大学会場の様子

公開講座

ねぶた学

第6回の公開講座では、佐々木ゼミのゼミ生による研究調査報告を行った。佐々木ゼミは2024年9月18日～22日にかけて東北の祭礼、アーカイブ調査を行った。対象としては岩手県の盛岡さんさ踊り、仙台の七夕まつり、山形県の花笠まつり、秋田県の竿灯祭りである。特に盛岡さんさ踊りと花笠まつりに関しては、関連団体に直接話を聞くことができた。

報告では、各県がそれぞれ試行錯誤し、保存継承に努めていることを指摘した。例えば、岩手県の盛岡さんさ踊りでは、盛岡さんさ踊り推進会や仙北小鷹さんさ踊り保存会などの団体、保存会が主体となり指導を行っている。宮城県仙台七夕まつりでは、七夕で使う飾りの制作を地域の女性を雇用している業者に依頼している。山形県の花笠まつりでは、四方山会が小学生に踊りや歴史を指導していた。秋田県の秋田竿灯祭りでは、秋田竿灯祭り実行委員会が主体となり小中学生に指導している。すなわち、どの県においても後継者育成のための努力がなされていることがわかった。

また、伝承のための博物館などに注目すると、岩手（もりおか歴史文化館）、仙台（七夕ミュージアム）、秋田（ねぶり流し館）は充実していたことがわかった。これに対し、山形県の花笠まつりには文化を資料として保存継承していくための建物がなかった。地域住民や歴史的に関わりがない人など多くの人が、いつでも山形の文化や花笠まつりの歴史を知ることができるよう、歴史を記録し保存しておく施設が今後アーカイブの面で必要になってくるのではないかと考えた。

最後に、これらの調査を「青森ねぶた祭」の現状と比較して、青森市でも「ねぶた」に関する教育のさらなる充実、そして観光施設ではなく学術面や伝承も充実した、ねぶたの博物館が必要であることを指摘した。

地域連携センター 兼任研究員 教授 佐々木 てる
地域みらい学科 佐々木ゼミ2年生

全6回のセミナーは、ねぶた新時代と題し、近年デビューした新人ねぶた師に語ってもらった。10～11月にアウガ5階青森市男女共同参画プラザ「カダール」AV多機能ホールで開催され、受講者数は延べ298名であった。

- ・第1回 ねぶた師 野村昂史氏
- ・第2回 ねぶた師 吉町勇樹氏
- ・第3回 ねぶた師 塚本利佳氏
- ・第4回 ねぶた師 小財龍玄氏
- ・第5回 ねぶた師 福士裕朗氏
- ・第6回 研究報告会「地域×アートを考える～伝統文化の保存と特色のある街づくり～」
司会：青森公立大学非常勤講師 青森テレビアナウンサー 今泉清保氏
基調講演：青森公立大学非常勤講師 第7代ねぶた名人 竹浪比呂央氏
研究報告：青森公立大学 地域みらい学科 佐々木てる教授、佐々木ゼミ2年生



第6回 佐々木ゼミ発表の様子

縄文と世界の遺跡を比較する ～古病理学の視点～

今回、研究活動による先進的な知見と次世代を担う世代への教育を行うために、最先端の研究を行っている研究者を青森に招聘し、公開講演会を行った。本企画は青森学術文化振興財団の研究助成に基づいて行われた公開講演会「縄文と世界の遺跡を比較する～古病理学の視点～」(オーガナイザー長岡朋人教授)である。座学だけではなく、模型を用いながら実習形式での講義を取り入れた。長岡教授は生物考古学とアンデス社会について、藤田尚客員教授(金沢大学)は縄文時代の虫歯について、藤澤珠織准教授(青森中央学院大学)は青森県の遺跡について、大藪由美子学芸員(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム)は弥生時代の土井ヶ浜遺跡について、それぞれ異なる視点から話題を提供した。今回の講演者は日本国内外の調査で研究成果を挙げている研究者であり、縄文と世界を比較する視座から、青森の文化財の価値を高める意図がある。

講演会を行った時期は三内丸山遺跡のさんまる世界遺産ウィークと重なっていたため、定員より参加者は少なめであったが、遺跡の発掘を行ってきた担当者や遺跡のガイドなど、専門家を含めた多くの人が参加した。参加者は10歳代から80歳代まで幅広く、最先端の研究の知見に触れることに強い関心を示すとともに、活発な質疑応答が行われた。研究者の目線での青森の遺跡や文化財のアピールにより、これまでのSNSに局在している魅力発信のあり方を変える試みは参加者の熱心な姿勢から目的を達成したと推察された。青森の将来を担う次世代への教育活動により、地元の文化財の価値を高め、将来に向けた遺跡や文化財の保全や新しい研究調査の発展を見込める。青森県の文化遺産を世界にアピールするためには、文化遺産に関する先進的研究の理解増進活動は必須である。

地域連携センター 兼任研究員 教授 長岡 朋人

全4回のセミナーは、7月に県民福祉プラザで開催され、受講者数は延べ84名であった。

- ・第1回「生物考古学とアンデス世界」(長岡朋人教授)
- ・第2回「古病理学から見た原始古代の人々ー健康から過去を探る・現代を考えるー」(金沢大学 古代文明・文化資源学研究所 藤田尚客員教授)
- ・第3回「あおり人骨再発見！」(青森中央学院大学 藤澤珠織准教授)
- ・第4回「弥生時代の人たちとその暮らしー土井ヶ浜遺跡出土人骨の調査から見えてきたことー」(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 大藪由美子学芸員)



第1回 長岡朋人教授

浅虫てつがく対話 ―話す・聞く・考える。あたらしい思考が動きはじめる。―

「浅虫てつがく対話」は、青森の「ランドマーク」のひとつ「浅虫」の地に「子どもから大人まで、ともに参加することができる対話の場所をつくり、探究的な対話の可能性を探ろうという試みである。今年度〔春の部〕は特別企画として、日本近代文学を研究する横手一彦教授（青森公立大学）をお招きし、講演会「浅虫温泉と太宰治『人間失格』——心身の傷 湯治場 来し方 再生 再構築（場）」を開催した。ここで解明されようとしている対象は、文学作品の背景に広がり奥行きをなしている、重層的な意味での「記憶・記録・記述」である。これを横手教授は三つの「記」として語る。配布された10頁を超える大部の資料と年譜、投影された100枚にも及ぶスライド写真と図版によって、その場所「浅虫」とその人「太宰治」の所縁、『人間失格』の最終部近くに描かれた「海辺の温泉地」という記述の含意するところが浮き彫りにされていく。横手教授は、来場者の方々、大学生や高校生からの問いかけに応じ、講演と対話の時間を通じて、研究の生き生きとした場面を再現していった。

このワークショップは「対話の場所をつくる」「自分の問いをつくる」、ことを目標にした、ある種の制作的な試みでもある。対話する場所「トポス」とは、そこで語られる話題「トピック」のことである。他者と言葉を取り交わし、相互に問いを発するところに、探求的な思考の萌芽を見出すことがねらいである。「浅虫てつがく対話」〔秋・冬の部〕は「遊ぶこと、学ぶこと、はたらくこと」をテーマとして掲げた。浅虫に住む大人や子ども、青森の各地から来てくれた高校生と先生方、そしてTAの本学学生が多数参加する対話のなかで、「働くことに夢はあるのか」という驚くような問いも投げかけられる。この問いに答えること自体は難しくはないとしても、ある問いが何を意味しているのかを考えると、探求はふかまる。今年度は、もうひとつ大きな魅力が「浅虫てつがく対話」にあった。浅虫の喫茶店《カフェ・アプリコット》に会場をお借りして、文字どおりコーヒーを片手に対話をくり広げたことである。ひとときの「哲学カフェ」が浅虫に誕生したのである。花や珈琲、懐きしての宇宙見物から豊かに刺激を受けた思考がある。山路を登りながら、こう考へた…というモチーフから名文が紡ぎ出されることもある。いつも過ごしている教室や研究室を離れ、またほかの場所に身を置くことで、あらたな哲学の思考が生まれてくるかもしれない。

地域連携センター 兼任研究員 准教授 大森史博

全3回のセミナーは、春の部を5月、秋の部を11月、冬の部を12月に開催し、受講者数は延べ73名であった。

- ・春の部「浅虫温泉と太宰治『人間失格』」（横手一彦教授）
場所：道の駅「ゆ～さ浅虫」会議室
- ・秋の部「対話の場所をつくる・自分の問いをつくる」（大森史博准教授）
場所：道の駅「ゆ～さ浅虫」会議室
- ・冬の部「問いをつくる・問いをふかめる」（大森史博准教授）
場所：青森市浅虫「カフェ・アプリコット」



冬の部 青森市浅虫 カフェ・アプリコットにて開催

経営塾

地方創生の時代において、いち早く独自のアイデアと行動力を持って活躍している講師を招聘し、講義をおこなった。今年度は青森県にゆかりがあり、まさしく現在活躍している起業家の方々にお越しいただいた。

全6回のセミナーは、5～7月にアウガ5階青森市男女共同参画プラザ「カダール」AV多機能ホールで開催され、受講者数は延べ101名であった。

- ・第1回「持続可能な地域づくり～古牧温泉再生から学ぶ消費者起点のマーケティングの重要性」
(株東北アレンジャーズ代表取締役 佐藤大介氏)
- ・第2回「青森の未来のカタチを創る！地域創生ビジネスの作り方」
(社内企業家、洋上風力会社代表 平塚隆介氏)
- ・第3回「地域に根ざした広告会社の取り組み」
(株東北博報堂青森支社長兼ビジネスデザイン部長 安保隆史氏)
- ・第4回「浅虫の“いま”～海も、山も、温泉も、ねぶたも～」
(一社)浅虫温泉観光協会会長 中村彰利氏)
- ・第5回「面白いまちをデザインする」
(株Qlock Up代表取締役 中村公一氏)
- ・第6回「地方からの新たな息吹「地域イノベーション」とその意義」
(三重大学教授 西村訓弘氏)

青森公立大学 公開講座 2024 **経営塾** 受講料無料

地方創生の時代において、いち早く独自のアイデアと行動力を持って活躍している方を招聘して、講義を行いました。受講者数は延べ101名であり、まさしく現在活躍している起業家の方々にお越しいただいた。

担当：コーディネーター 佐々木 てる (青森公立大学)

第1回 5月23日(木) 5月20日(日)	第2回 5月30日(木) 5月27日(日)
第3回 6月11日(火) 6月7日(土)	第4回 6月18日(火) 6月14日(土)
第5回 6月27日(木) 6月24日(日)	第6回 7月5日(金) 7月2日(日)

開催時間：18:30～20:30 (開演18:15) 定員：各回70名 (先着順) 会場：アウガ5階 青森市男女共同参画プラザ「カダール」AV多機能ホール (アクセス) 両校生以上



第4回 中村彰利氏

青森公立大学公開講座2024 **大学院公開セミナー**

今日の社会には、地域を問わず、多様かつ複雑な課題がある。たとえば人口減少や長寿化は社会保障制度を介して財政赤字とも関連し、また企業行動にも影響を与える。したがって問題の解決には1つの視点ではなく、複数の視点からの柔軟なアプローチが求められていると言える。本学大学院では経営・経済学分野の研究者を中心に複眼的な視点をもった人材の育成に取り組んでいる。

本セミナーの目的は、このような各講師の研究活動を紹介による、地域社会への「知」の還元である。

7月4日(木) 7月1日(日)	7月9日(火) 7月5日(土)
7月11日(木) 7月8日(日)	7月16日(火) 7月12日(土)

会場：青森公立大学 講義棟 生田 泰亮 准教授

大学院公開セミナー

今日の社会には、地域を問わず、多様かつ複雑な課題がある。たとえば人口減少や長寿化は社会保障制度を介して財政赤字とも関連し、また企業行動にも影響を与える。したがって問題の解決には1つの視点ではなく、複数の視点からの柔軟なアプローチが求められていると言える。本学大学院では経営・経済学分野の研究者を中心に複眼的な視点をもった人材の育成に取り組んでいる。

本セミナーの目的は、このような各講師の研究活動を紹介による、地域社会への「知」の還元である。

全4回のセミナーは、7月にアウガ5階青森市男女共同参画プラザ「カダール」研修室で開催され、受講者数は延べ101名であった。

- ・第1回「高齢者就業の現状と地域への影響～生涯現役社会に向けて」
(大矢奈美研究科長・教授)
- ・第2回「地域課題解決に向けた多職種協働入門」(藤沼司教授)
- ・第3回「イノベーションとマーケティング プラットフォーム・リーダーシップ 概念の起源と要点」(生田泰亮准教授)
- ・第4回「「年収の壁」と非正規雇用」(木立力教授)



第1回 大矢奈美研究科長・教授

外国語講座

青森公立大学公開講座2024 公益財団法人青森県文化振興財団協賛事業

外国語講座

TOEIC入門 ～500点コース～ 青森公立大学 教授 丹藤 永也 【開催日】 11月5日◎、11月12日◎、11月19日◎、11月26日◎ 【時間】 18:30～19:30 (開催18:15) 【定 員】 20名(先着順) 15名(申込満員) 【場 所】 青森公立大学 大町校舎1階 地域連携センター (伊予スナ) 室	英語プレゼンテーション入門 青森公立大学 講師 エシアナ・ベネス 【開催日】 11月30日◎、12月7日◎、12月14日◎、12月21日◎、12月28日◎ 【時間】 18:30～19:30 (開催18:15) 【定 員】 15名(先着順) 10名(申込満員) 【場 所】 青森公立大学 大町校舎1階 地域連携センター (伊予スナ) 室
ビジネス英語入門 青森公立大学 准教授 江連 敏和 【開催日】 11月5日◎、11月12日◎、11月19日◎、11月26日◎ 【時間】 18:30～19:30 (開催18:15) 【定 員】 10名(先着順) 10名(申込満員) 【場 所】 青森公立大学 大町校舎1階 地域連携センター (伊予スナ) 室	ことばと文化 青森公立大学 教授 香取 真理 【開催日】 11月29日◎ 【時間】 18:30～19:30 (開催18:15) 【定 員】 50名(先着順) (17名◎) 申込満員 【場 所】 アガガ屋 青森駅前参画プラザ (アガガ屋) 新館2F (伊予スナ) 室
英文学入門 ～原著で知るピーター・ラビットの世界～ 青森公立大学 講師 成田 英美 【開催日】 11月23日◎、12月4日◎、12月5日◎、12月6日◎ 【時間】 18:30～19:30 (開催18:15) 【定 員】 10名(先着順) 10名(申込満員) 【場 所】 青森公立大学 大町校舎1階 地域連携センター (伊予スナ) 室	申込方法 住所(氏名(ふりがな)、電話番号、希望するコース名を明記のうえ、各コースの申込締切日までにメールでお申し込みください。 申込先: 青森公立大学 地域連携センター 事務局 E-mail: kouze2024@mat.nebuta.ac.jp TEL: 017-764-1599 申込システム

主催 青森公立大学 <http://www.nebuta.ac.jp/> 共催 青森県工業局 <http://www.aido.or.jp/>
 協賛 青森公立大学地域連携センター TEL: 017-764-1599 (申込受付時間: 10:00～17:00) 青森県文化振興財団

本講座は、一般的には高等教育機関での講義となる「ことばと文化」「英文学」などのテーマに関して地域の方々の教養を深めること、TOEIC 講座や英語プレゼンテーション講座を通して、青森県民の潜在的な英語力向上にもつながることを目的として開催した。また講座終了後、受講者がこれまで以上に積極的に外国人と交流し、青森県のさらなる国際化に寄与することを期待している。

本講座では、5つのコースを開設し、9月～12月に青森公立大学地域連携センター及びアウガ5階青森市男女共同参画プラザ「カダール」研修室で開催され、受講者数は延べ79名であった。

- ・ TOEIC 入門～500点コース～ 全4回 (丹藤永也教授)
- ・ 英語プレゼンテーション入門 全4回 (エシアナ・ベネス講師)
- ・ ビジネス英語入門 全4回 (江連敏和准教授)
- ・ ことばと文化 全1回 (香取真理教授)
- ・ 英文学入門～原著で知るピーター・ラビットの世界～ 全4回 (成田英美講師)



英語プレゼンテーション入門
エシアナ・ベネス講師

青森公立大学地域連携センター

大学キャンパス (事務室、スタートアップラボ)

〒030-0196 青森市合子沢字山崎153-4
 電話: 017-764-1589 Fax: 017-764-1593
 E-mail: renkei@mat.nebuta.ac.jp
 開室日 月曜～金曜 開室時間 8:30～17:00
 閉室日 土曜・日曜、祝日

まちなかラボ

〒030-0801 青森市新町1-3-7 アウガ6階
 電話: 017-718-7025 Fax: 017-776-2082
 開室日時は青森公立大学公式ホームページでご確認ください。
 URL: <https://www.nebuta.ac.jp/for-general-region/machinakalab-syoukai/about-machinakalab>

